こうして血友病の息子アレクシスが誕生したことが、ラスプーチンのような霊的指導者を求めた遠因となったのである。

第八章の「群衆暗示」では、中世ドイツの舞踏狂、魔女狩り、ヒトラーを例にあげ、集団ヒステリーについて述べている。

第九章の「人造災害」では、サリドマイドの薬害やロンドンの大気汚染などの公害に止まらず、医学の進歩がもたらした人口増加や食糧問題、飢餓までが取り上げられている。

この本は四半世紀前に書かれているため、エイズについて（本文では）触れていないし、また結核についてはあまりに影響が大きすぎるので省かざるをえなかったということであるが、それを除けば古代から現代まで重要なテーマがほぼそろっている。確かに個々の内容は、大部分が既に知られている事柄ではあるが、具体的なデータを提示して自説を展開しており納得させられるものがあるし、一気に読ませてしまう。しかも記載は関連する医学史的事柄にまで及ぶので内容は充実しており、気軽に医学の歴史に触れるのに格好の本であろう。

なお自分の専門が皮膚科学であるので、とりわけ第三章の梅毒についての記載に興味をもった。梅毒と似たフランベシアという病気がアフリカにあり、梅毒と同様スピロヘータで起こり、細菌学的には両者は区別がつかないのだが、著者は梅毒のスピロヘータがフランベシアのスピロヘータから変化したものと考えている。確かに気候条件が変化するとフランベシアの症状にも変化が起こるので面白い推測だと思う。著者は従ってアフリカ→ヨーロッパという梅毒伝染ルートの可能性について指摘している。にわかに認め難い説ではあるが、最新の遺伝子工学的な研究によって、遺伝子レベルでの発見などがもしあれば、新たな展開も期待できよう。

（今泉　孝）

〔法政大学出版局：東京都新宿区市ケ谷田町二―一四―一、電話〇三―五二二八―六二七一、一九九六年六月、四六判、二九四頁、三〇四五円〕

土屋雅春著『医者のみた福澤諭吉』

私が、土屋雅春氏の書かれた『医者のみた福澤諭吉』の書評を書くことになったのは、中津の出身で多少医学史に関わっているからであろう。

事実私は、中津にある福沢諭吉の実家から五〇〇メートルも離れていない所で生まれ、諭吉の家を掃除し、諭吉の家やその周囲の空き地を少年時代は遊び場として育った。諭吉は、筆者にとって最も身近な郷土の偉人であり、富士山のようにそびえる先輩である。

諭吉に関する研究は「福澤学」ともいうべき学問のジャンルがあり、今なお多くの研究者がさまざまな角度から研究を続けている。著者の土屋氏は、慶応義塾で医学を学んだ医者

の立場から、諭吉が医学や福祉にどのように関わり、日本の衛生環境、健康についてどのように考えていたのかを明らかにしている。

諭吉は、明治三十四年（一九〇一）に亡くなったが、死後七十六年を経た昭和五十二年（一九七七）に墓を掘り起こしたところ、亡くなった時のままの姿でミイラ化されて発見された。遺体は福澤家の意向もあって、解剖もされず火葬されたという。

著者は、医者という立場から諭吉の病歴について調べている。諭吉は、六十八歳で亡くなるまで五回も大きな病気に罹患している。まず、七歳の時に天然痘に罹り、適塾時代に腸チフス、一四、五年後には発疹チフス、明治三十一年（一八九八）六十五歳の時に第一回の脳卒中に罹った。著者は、これを脳梗塞であろうと述べている。この時の医師団は、松山棟庵、山根文策、北里柴三郎であった。命取りになった第二回の脳卒中は脳出血であろうと述べている。

諭吉が自らの健康法として、米つきと居合いを行っていたことは、中津の資料館にも展示してある。明治二十八年十二月三十一日の居合数抜は千本におよんでいる。諭吉が、並大抵でない体力を有していたことが知られている。また、諭吉が西洋人の食生活が栄養的にも優れて、それが人間の体力、知力にも影響すると考え、諭吉自身も食卓に洋食を取り入れたことについても述べている。諭吉は、緒方洪庵の適塾で学んだことから、早くから医学医療に興味をもち、咸臨丸でサンフランシスコに行った時も、海員病院を訪れこの後、ヨーロッパへ外遊した時も、パリのラリボアジェル病院を見学し、「西洋事情」で西洋の病院を紹介している。

諭吉は、ロシアを訪れた時も病院を訪ね、手術を見て失神している。著者は、このエピソードを諭吉の人間的な一面であると述べている。

築地の中津藩中屋敷跡には「蘭学の泉はここに」の碑がある。藩医前野良沢が中心となって、この地で「ターフル　アナトミカ」を翻訳したことから蘭学発祥の地であることを記念して建てられたものである。諭吉は、杉田玄白の『蘭東事始』を『蘭学事始』として明治二年に出版した如く、前野良沢達の蘭学のパイオニアとしての苦労に大いに感銘していた。諭吉は、その功績を称えるべくこの地に「蘭化堂設立の目論見書」というものを記しているという。同じ地に諭吉の蘭学塾が作られこの場所が、慶応義塾発祥の地ともなるのであるから、運命の巡り合わせに驚くばかりである。

実際、中津藩は前野良沢のみならず、藩主奥平昌高の蘭和辞書、和蘭辞書の出版、シーボルトとの交流、村上玄水の解剖、辛島正庵の種痘、田代基徳の近代外科学と蘭学にゆかりの業績が多く、諭吉と蘭学との関わりは決して偶然ではないことは最近よく知られてきた。諭吉が、蘭学や西洋医学に旺盛なる興味を示すのも、中津の医学史を紐解けば容易に理解できる。

諭吉は、シーボルトの遺児お稲を明治天皇側室の主治医と

して推薦したり、北里柴三郎の伝染病研究所の設立に協力したり、明治六年には慶応義塾医学所を開設したりして、日本の西洋医学発展に大いに貢献したことを、本書は余すことなく記しており、医者のみた諭吉像によく迫っており一気に読める好著である。

最後に、慶応義塾の北里講堂の二階の会議室に掲げられている、諭吉の医者に贈るための、七言絶句の漢詩について触れている。その意味するところは「病気を治すのは自然（神）であるなんて思ってくれるな。毎日勉強している医師の自分が治してやるとおもいなさい。自然が治すんだから、ただ見ていればいいということではない。患者を見たら千里の先まで、手の裏まで見通し、孫の手のように、患者のかゆいところの隅々まで手の届くような、そういう医者になりなさい」。

（川嶌　眞人）

〔中央公論社：東京都中央区京橋二―八―七、電話〇三―三五六三―一四三二、一九九六年十月、新書判、二三五頁、七二〇円〕

精神科医療史研究会編集

『長山泰政先生著作集』

「精神病者及び精神異常者を精神病院外の自由なる天地で医学的（精神病学的並に精神衛生学的）或は社会的見地より、患者の生活状態を出来得る限り侵害せずに、各人に適した方法で保護する」のが「院外保護」という（長山泰政「独逸公立精神病院に於ける精神病者の看護並に保護事業」）。ドイツ語のOffene psychiatrische Fürsorgeを訳して「院外保護」と呼んだ。この名称を作り、日本で初めて院外保護を実施した先駆者が、精神科医長山泰政（一八九三～一九八六）である。

精神科医療史研究会編集の『長山泰政先生著作集』によると、長山は府立大阪医科大学（今の大阪大学医学部）精神病理学教室に所属していた一九二九（昭和四）年四月、和田豊種精神病学教授、長崎仙太郎薬物学教授らとヨーロッパ視察の旅に出た。ベルリンに着くと和田教授から「君はドイツに残って研究するように」と言われ、長山はドイツに残り、ミュンヘンで精神病理学を研究。たまたまハンブルグで精神病理学講習会に出席し、シモンの「最新の作業療法」、コルプの「精神病者の院外保護」の講義に感銘し、ドイツ国内一九カ所の公立精神病院を数カ月間、詳細に視察調査した。帰国後は大学に戻らず、大阪府立中宮病院に勤め、作業療法、院外保護、家族看護を実施し、海外の事情などを記して論文を次々と発表したが、神経学雑誌には受理されなかったという。（日本作業療法士協会精神科作業療法基準委員会「長山先生訪問記」）

著作集の第一部著作では、「欧州精神病院に於ける作業療法」などの論文、随筆、滞欧日記など二十篇余りが掲載されている。長山は論文「精神病者の院外療護特に院外保護に就て」で、ドイツで広く行われている病院外保護の推進と、保護医と保護員のきちんとした養成を訴えている。保護医は精神病者の院外保護で、患者を指導・監督・保護する精神科医